
メイエとドラゴンの剣

豆腐屋のナウい息子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイエとドラゴンの剣

【Nコード】

N3945BA

【作者名】

豆腐屋のナウい息子

【あらすじ】

騎士メイエは女である。仲間達に無用な気遣いをさせまいと、女であることを隠して今や騎士団の副長となった。神を信じ、仲間を信じ、その仲間を守るため、彼女はまた剣を取る。

もうすぐ出発の時間だろう。

この洒落た部屋とも暫しのお別れだ。

私は騎士なのだから自分のことは自分でやると言ったのだが父がそれを許さず、メイドを押し付けてきた。

服はこれが似合うだの、髪留めはこれが良いだの、とてもうるさいメイドだ。

でも、とても助かっている。

「お嬢様、もうすぐご出立の時間です」

「ああ、わかつている。私は騎士なのだから、……お嬢様と言うのはやめてくれないか」

つい最近、いまだ顔も見ただこともない聖女様より騎士団の副長を任されたばかりなのだ。

「お嬢様はグラシアン家のお嬢様です。この屋敷はグラシアン領も同じこと、お嬢様とお呼びして何か粗相がございましょうか」

「部下達は私を騎士として見ているのだ。変に女として意識させたくない」

「……では、この屋敷内でのみお嬢様とお呼びさせていただきます」

どうしても私をお嬢様と呼びたいようだ。この無愛想な表情を崩さないメイドはアラナと言う。私よりも少し背が低めで、私が気付かない間にいろいろと気を利かせてくれる素晴らしいメイドだ。たぶん私よりも年上だろう。彼女は年齢を問うても答えてくれない。

「今後の予定をもう一度頼む」

「はい。これより出立後、ランマール高原で第14、15師団と合流。合流後は師団長との会食が予定されています」

「人の身体をジロジロと眺めるジジイ共と食べるのか」

「ジジイ共ではありません。師団長です」

「ああ、わかっている。どうして私がこのような……」

「少数精鋭全戦無敗のロードル騎士団といえば、この国の兵士達は皆知っているはず。その騎士団の副長であるお嬢様が激励ともなれば、兵士達の士気はどんな敵をも粉碎するでしょう」

「いつ言つのは王子殿下の仕事だろうに」

「王子殿下はご公務が詰まっているそうで、お嬢様にこの話が来た

わけです」

「ご公務ねえ……どうせまくだらない遊びでも思いついたんだろ
う」

「お嬢様、いくら神の命より集まった騎士団の副長とはいえ、国の
王子殿下に向かいそのような」

「あーわかったわかった。きちんと友を敬い、愛することを誓います
ー」

鎧を着て、準備も終わったところで王都の正門に行ってみると異様な
人だかりが出来ていた。

私が着ている鎧とは違う色だが、我が騎士団の鎧と一目でわかった。
今日私以外に王都を発つ者はいないはずだが……まさか……

「あ！副長だ！副長がお見えになったぞ！」

「副長！お気をつけて！」

あーうるさいうるさい、何も見えない。基本的に騎士達は私より大
きいから、囲まれると前も後ろ見えなくなるのだ。

「今回の任務を何故お断りされなかったのですか」

やつと図体だけは一流な騎士達が道を開けてくれたかと思つたら、
またも図体のでかい騎士に行く手を阻まれた。

「王子殿下から渡つて来た話だ。断るわけにもいくまい」

「しかしながら、それでは副長が女性と言うことがバレてしまいま
す」

耳元で小さく、そしてゆつたりと話し、私の行く手を阻む彼は名を
ルーシュと言う。この騎士団の宰相的人物であり、最年長でもある。

「王子が司令部でバラしてしまったのだ。どうせあつという間に国
王軍全体に広まる」

「部下達に知られてもいいのですか」

「時期を見て話すつもりだったことがただ早まるだけのこと。それ
に身辺の部下には教えている」

「……」

「わかつている。我が神に背くようなことはしない。俗の仕事はこ
れが最後だ。私達が王子殿下によくしていただいているのは知って
いるだろう」

ルーシュは特に何も言う気はないようだ。ルーシュの言わんとする
ことはわかる。我々は神の剣であるのだ。
俗に染まっっていいことなど、ないのだ。

豪華な馬車に私と護衛2人だけ。計6人の護衛はその誰もが聖女より神託を得て騎士となった者達だ。

護衛などいらんと言ったのにそれが任務であるかのように勝手に勝手に来た。馬車に乗っている騎士に聞いてみると事実、任務である。

「副長は何故騎士になられたのですか？」

この者達には私が女であることは伝えていない。この後すぐにバレルのだから、教えてもいいだろう。

私が女であることを知らない部下達の中では「副長は寡黙だ」「炎を操る魔獣と戦って喉を焼かれたのだ」と言われているそうだ。着ていたプレートアーマーの兜を取った。

「え……」

「きっかけは父への反抗だ」

驚くのも無理はない。女であると教えたルーシュと騎士長以外は皆怒りをこらえるように顔を真っ赤にしていた。今日の前にいる彼らも例外ではない。

ちなみに今いる新人のほとんどを私が一度テストと言う名目でコテンパンにしている。女に負けたと知っては男のプライドとやらがズタズタにされるとアラーナが言っていた。

「副長は……女性だったのですか」

「そついうことだ。自分の上司が失望したか？」

「いえ！自分は副長をお守り通すことを再度誓います！」

絶句していたもう一人も頷いた。彼こそ寡黙と言つものである。

ともあれ、私が騎士として国の馬車に乗るとはな。
もうそろそろランマールに入ることだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3945ba/>

メイエとドラゴンの剣

2012年1月10日10時53分発行